
これは私のエイミーかもしれない

Six315

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これは私のエイミーかもしれない

【Nコード】

N7773S

【作者名】

Six315

【あらすじ】

ほむら視点。まどか マギカのドラマCD「Memories of you」を聞いて即興で仕上げたアナザー4週目の世界。短編です。10話までのネタバレを含むよ。

次の点を把握しておけば聞いてなくてもOKなんじゃないかな。

1・1週目のまどかはエイミーという名前の黒猫を助けた。2・ほむらに「私に何かあったらエイミーのことはよろしくね」と伝え

ていた。

気楽に読んでいってね！

それは、“3週目”の私を待ち受けていた悲劇。

ほむらちゃん、過去に戻れるんだよね？

こんな終わり方にならないように、歴史を変えられるって、言ってたよね。

キュウベえに騙される前のバカな私を、助けてあげてくれな
いかな？

私はまどかの言葉に頷いて、銃の引き金に指を掛けた。

そうだ。

ほむらちゃん、寂しがり屋だから。

だから、おまじない。

まどかは、震える手で私の指に触れた。暖かなものが、流れ込んでくる気がした。

きっと素敵な出会いが、あると思うよ。

まどかは笑った。

じゃあ、またね。

そして私は、私の手で、私の一番の友達を殺し 時間をさかのぼる。

4週目の世界が始まる。

私は1つの決意と共に動き始める。

もう誰にも頼らない。

* *

まどかの家に入ろうとする一白い害獣>インキュベーター<を捕獲して夜食でペロリ、ぐっすり眠って翌朝爽快な気分で家を出たら、痩せた黒猫がのたりのたりと道路を横切っていて、そこを指すように佐川—QB>きゅうびん<のトラックが走り込んで来る。

私は気付くと魔法を使つて時間を止めていて、サツとネコを救出ついでに近くのペットショップからカメの餌をかつぱらつてきて、トラックの乗車席にぶちまけておいた。地味に嫌なにおいよね、あれ。

そして時は動き始める。トラックから男の絶叫が聞こえたけれど、私は知らない。因果応報じゃないかしら。

にゃあ

黒猫が私の足に身を寄せてくる。

不意に記憶が蘇った。それは私が魔法少女になる前、1週目の世界の記憶。

猫を助けるために魔法少女になった、なんて言ったら、マミさんに叱られちゃうかな。

まどかの言葉。今となつては私だけが覚えている言葉。

いざとなつたら、エイミーのこと、よろしくね。

そして私は、自分が黒猫を助けずにいられなかった理由を理解する。この子は似ているんだ、エイミーに。もしかしたら、エイミー本人かも……

にゃ!

猫が急に走り出したから、私はそれを追いかける。行き先は別の交差点、そこでは別の黒猫がのりくらりと道路を歩いていて、横からはトラック。なぜか窓からはカメの餌を撒き散らしている。

私は時間を止めて二匹目の黒猫を助け出す。トラックの運転席を覗いてみると、助手席に手つかずのイカ焼きが置いてあったので没収。因果応報よ。

イカ焼きは黒猫たちが美味しくいただいています。出来たてなのが凄くいい匂いで、私もお腹がすいてくる。コンビニで何か買おうかな、と思つて周囲を見回したら。

にゃあ。

三匹目の黒猫。すごくやせ細っている。けれどももうイカ焼きは残っていない、二匹があつというまに平らげてしまったから。

いざとなつたら、エイミーのこと、よろしくね。

まどかの言葉が蘇る。この3匹目がエイミーだったら……私はまどかの約束を破ることになる。でも、エイミーじゃない可能性だつてある。黒猫なんてたくさん居るんだから。それに早く学校に行かないと。

けれど、3匹の黒猫は私の方をキラキラした目で見ていて、私はそれに勝てなかった。私は3匹を家に連れて帰つて、ワルプルギスの夜対策に買い置きしておいたサンマの干物を食べさせていた。幸せそうな黒猫5匹。

……あれ、増えてない？

猫たちはご飯を終えると思いきいに過ごし始める。寝る子もいれば、背中を丸めて柱でツメをコリコリする子もいる。ねこパンチの応酬を始める子もいる。ああもう喧嘩はだめだよ止めないと、つてちよつとまって私を引つ搔かないで、きゃあああああああああ……！！　じ、時間を止めて脱出しないと、でも密着されてるから止めても無駄じゃない。ひiiiiiiiiii、誰か助けて……まどか……

ねこ地獄から脱出するともう夕方。猫たちは夕食よこせとばかりに鳴き声をあげていた。私はワルプルギスの夜との戦いのために用意していた缶詰を開けた。　シーチキン、サバ、牛肉大和煮、キユ

ウベえ……

キュウベえ？

昨日ボコボコにした後部屋に釣るしておいたキュウベえの死体をネコたちは食べていた。

「まったく、この星の生物は恐ろしいね」

部屋の影から、新たなキュウベえが現れる。

「まあ、古い体の処分をしてくれるだけ有用だね……ってちょ、ちよつと、うわあああああああ！！！！」

猫たちは缶詰だけじゃ足りなかったのか、白い小動物に襲いかかった、戦いは数。あつという間にキュウベえは猫のごはんになっていた。

お腹一杯になったのか、猫たちは揃ってげっぷをして、それからウインク。ついてこいと言わんばかりに。

ぞろぞろと家を出ていく猫たち。私はそれを追いかける。その間にもあちこちから猫が集まってくる。

やがて私は鹿目さんの家についていて、見れば庭の端にキュウベえが追い詰められていた。

「せ、せつかく新しい体になったのにうわあああああ！！！！」

キュウベえは猫が美味しく頂きました。

「ここかあ、今日の猫集会の場所は」

猫の声に混じって、女の子の声。振り向けば、そこには佐倉杏子。……おい、なんだよこれ」

「私も聞きたいわ」

私を中心として、今や何十匹単位もの猫たちが周囲に集まっていた。

「お前、魔法少女か？」

「ええ」

「……なんつーか、その、すごい魔法だな」

「魔法なのかしら」

私が首をかしげていると、猫の一匹が佐倉杏子の前に飛び出した。口にはキュウベエの死体を加えていて、食べ、とばかりに突き出した。

「いや、あたし、生肉はちょっと……」

たじろぐ佐倉杏子。けれどそのお腹がぐると鳴って。

「背に腹は代えられないかな……」

このままだと佐倉杏子が色んな意味でまずい一線を超えそうね…

…。

だから私は誘いかけた。

「ご飯、食べにこない？」

佐倉杏子は数秒迷ってから、頷いた。

「ゴチになります」

今や私の周りには百匹以上の黒猫が集まっていて、この中にはあのエイミーがいてもおかしくないほどだった。1週目のまどかが私に託した猫はどれだろう。どれが私の戦場なんだろう。

でも、どの子もみんな可愛い。一匹だけ選べと言われたら選べないくらい。だったらもう、全部が私のエイミー、私の戦場ってことでいいかしら。一匹一匹が私の大事な友達。

私の友達に凶暴で、時折外に出ては白い小動物を捕まえてきて、皆で鬨って遊んでいる。死んだら死んだで食料にしてる。有効活用ね。

私と佐倉杏子はデリバリーのピザで夕食を済ませた。

「この恩は一生忘れねえ！」

まさか佐倉杏子の泣き顔を見ることになるとは思わなかったわ。

「じゃあ、恩返しに1つ付き合っつて」

「一宿一飯の恩義だ、任せるよ」

「ワルプルギスの夜、知ってる？」

「ああ。強いんだろ」

「あの、巴マミ」

「な、何！」

「それ、魔法で治るわよ……」

「え？」

「私たちの体は、思ったよりもかなり魔法で調整できる」

「ほんとうに？」

「ほんとうに」

「ほんとうにほんとうにほんとう？」

「ほんとうよ。魔法は魔法を信じることを始まるから。信じて、貴女の可能性」

「わ、わかったわ！」

巴マミはその場でくるりと一回転した。

「えいっ！」

右手を掲げてキメポーズ。……うん、まあ、本人が幸せならそれでいいわ。

「今日から私は巴マミver2！」

ふーん。

「やっほい！」

猫に飛び込んでいく。

ほんとうは猫が好きだけど、アレルギーで近寄れなくて……その苦しみの果てに、猫に怯えるようになったのかしら。

そしてアレルギーが消えた今、猫への欲望が解放された……とか？
けれど猫たちは、さっ、と潮が引くようにマミから距離を取る。

「うっ……」

シヨンボリする巴マミ。

「どっして……」

「巴マミ」

見ていられないほど情けない表情だったので、私は思わずアドバイスしてしまう。

「体からまたたび臭をさせる魔法を使えばいい」

「な、なにそれ」

「魔法はイマジネーション。思いの力が奇跡」

「すぐそばで、適当ばかり言いやがって、と杏子が笑っていたけれど私は気にしない。というか、言ったら本当にそんな気がしてきたわ。」

「そうよね、イマジネーションでイノベーションよね！」

「そうそう、そんな感じ。」

「よっし！」

今度は左手を掲げてキメポーズ。

「今日から私はバマミseason3！」

数秒と置かず、黒猫たちは一斉にバマミに殺到した。

「きゃああああ！……！」

悲鳴。けれどすごく嬉しそう。そんなに猫と戯れたかったのかしら……

ああ。

そういえば。

今回の魔女は楽勝だったわ。弱点が黒猫だったから。

サンマの魔女。その性質は七輪。猫の餌にも有用。

「暁美さんには素敵な魔法を教えてくれた恩があるもの、なんだっ
てするわ」

「じゃあとりあえず、話を冷静に聞いてちょうだい。立ち話も何だ
から、私の家に来て頂戴」

「ちなみに杏子は途中から寝ていて、歩けそうに無かったので黒猫
たちに運んでもらったわ。」

杏子を布団に寝かせてから、私とバマミは話を始める。

まずは、私の事情の説明から

「じゃあ、暁美さんはワルプルギスの夜を倒すために未来から？」

「ええ」

「ちなみに、未来の私はどうなったの？ よかったら教えて。どんなことを言っても平気だから」

「ほんとうに？」

「ええ」

「バマミは頭を吹き飛ばされて死んだわ」

「え！？」

「あと、ソウルジェムが濁りきると魔女になるって聞いて、発狂してたわ」

「ま、魔女？」

「ええ」

「ソ、ソウルジェムが濁ると？」

「ええ」

「貴女も、私も？」

「ええ。そこで寝ているあんこも」

「……だったら、死ぬしかないじゃない！」

その行動は予測していたわ。私は時間を止めて、バマミを拘束（物理）する。

「暁美さんすみませんでした」

「バマミ、落ち着いて」

「ほんとうにすみませんでした」

「貴女の方が年上だからしっかりしてほしい」

「うそ。高校生かと……」

へえ……

バン！

思わず銃を取り出して威嚇射撃してしまったわ。

「すみませんごめんなさい暁美ほむら様」

「私の方が学年は下。バマミの事は先輩の魔法少女として慕っていた」

「今は？」

「微妙」

「うっ、いじいじ……」

「今から挽回して」

「が、頑張るわ！ それで、ワルプルギスの夜とはどう戦うの？」

「まず武器の調達。これを見て」

米軍基地の地図を広げる。

「え？」

戸惑うバマミに構わず、私は説明を始める。

「私が時間を止めている間に、三人で侵入して武器を接收。そのうち、出現予測地点を中心に、砲台などをセット」

「ええと、暁美さん、相手は魔女よね。魔法とかは使わないの？」

「兵器の管制に魔法を使うわ」

「そ、その、皆の力で敵を打ち破るとかは……」

「ミサイルがある。三人の魔力をそれに纏わせれば、必殺の一撃となる筈」

「魔法少女的にそれでいいの……？」

「問題ないわ」

「自信満々ね……」

ところで、とバマミは話を続ける。

「その、いずれ私たちも魔女になるって知った時、貴女はショックじゃなかった？ 私は……恥ずかしいけど、すごく、怖くて……」

「普通に生きている限り、ソウルジェムが濁りきることは無い。魔女になるのは、絶望した魔法少女だけ」

「自分が魔女になるとかじゃなくて、その、私たちって、要するに魔法少女を、仲間を殺してきたのかな、って」

「それは仕方のない運命。嘆いても何も始まらない。むしろ、彼女たちが魔法少女だった時の志を継ぐべき。彼女たちが命がけで守った世界を守り続けていくこと。それが私たちの使命。だから私たちは魔女を倒さないといけない」

「……そう、よね。ありがとう、暁美さん。すこし、気が楽になったわ」

そうも救われた表情をされると、罪悪感が生まれる。

……口から出まかせだもの。

でも、うん、悪くない。私たちは魔女を倒すことで、その魔法少女の遺志を継ぐ。そう思うと、いくらか気が楽になる。……欺瞞かもしれないけれど。

「とにかく、頑張りましょ、暁美さん、よろしくね」

そして私は、差し出された巴マミの手を握った。暖かった。

「これで友達ね」

友達。

……悪くないかも、しれないわ。

「巴マミ」

「何かしら」

「この付き合いが長いものであることを願っている」

「ええ。今回はワルプルギスの夜を倒さないとね。もう二度と、暁美さんに時間遡行をさせたりしないわ」

私は、頷いた。

* * *

そして日々が流れて、ついに決戦の刻がやってきて。

私はワルプルギスの夜に対峙する。

もう誰にも頼らない筈だったけれど、今の私は1人じゃない。

巴マミが居る。

佐倉杏子が居る。

そして、今や一万匹に膨れ上がった黒猫軍団が私についている。

結局エイミーがどの子なのかは判らないけれど、それで構わない。

一匹一匹が私の大事なエイミー。一匹だって奪わせはしない。

私は、もう二度と時間を逆行させない覚悟でもって戦いに臨む。
時間をさかのぼれば、ここで築き上げた絆が消えてしまうから。
そして消してしまうには、惜しいほどたくさんの絆があるから。

ここは私の戦場じゃない。

なんて、決して言わない。

ここが私の戦場だ。ここを私の最後の戦場にする。

来い。

(後書き)

(? ? ? ?) <ほむらたちの戦いはこれからだ！ (打ち切り)
rind

きれいなキューベえな『インキュベーターの没落』
http://ncode.syosetu.com/n2608s/もよろしく
すも() ()

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7773s/>

これは私のエイミーかもしれない

2011年4月27日16時25分発行